



海住山寺について

『みかの原 わきて流るる いづみ川 いつ見きてか 恋しかるらむ』の百人一首の歌で知られる瓶原(みかの原)を一望におさめる地に、海住山寺が創建されたのは、恭仁京造宮にさきだつ六年前、天平七年(七三五)のことと伝えられております。大盧舎那仏造立を発願あそばされた聖武天皇が、その工事の平安を祈るため、良弁僧正に勅して一字を建てさせ、十一面観音菩薩を奉安して、藤尾山観音寺と名づけたのに始まるということです。しかし、この寺は、保延三年(一一三三)に灰燼の厄に遭い、寺観のごとくを失ったのであります。

その後、七十余年を経た承元二年(一一〇八)十一月、笠置寺におられた解脱上人貞慶が思うところあつてこの観音寺の廃址に移り住み、海住山寺と名づけ、旧寺を中興されて、ここに現在の寺基が定められたのであります。観音様の浄土は南海の洋上にある補陀洛山であります。浄土とは、生ある限りいかなる人も対決しなければならぬ人間苦・人生苦を解決した真実の楽しみの世界を意味し、この世界に至る道が、いわゆる菩薩道(自他ともに真実の智慧にめざめ、生きとし生けるものをいづくしむ慈悲を行ずる道)にほかなりません。解脱上人は、この山をこうした菩薩道実践の場所とさだめて、観音の浄土にちなんで海住山と名づけられたのであります。瓶原の平野と、その彼方に連なる山なみは、あたかも南海の洋上に浮かぶ補陀洛山のごとくであり、とりわけうす曇りの日に山上から眺める光景はその感を深くして、いみじくも海住山寺と名づけたものとさえ思われます。

解脱上人貞慶(一一五〇～一二二三)は、左少弁藤原貞憲の子で、幼くして興福寺に入り、覚憲に師事してひたすら研学につとめ、維摩会・最勝会の講師までも歴任した南都仏教界随一の学僧であり、身を

つつしむときびしく、壮年に至り感ずる所あつて笠置山にかくれ、名利をのがれてもつばら徳をつまれた方でありましたが、晩年その心境がいつそうひらかれるにつれて、人々を教化して仏道にむかわしめるために、この海住山寺に移り住まれたのであります。上人は、弟子たちに「富勢名譽を望むは自己繼承の人にあらざる」と常におしえて戒律をおごそかにし、当山の草庵に移られてからも、戒律復興のため、南都興福寺の山内に常喜院を設けて律学の道場とされております。この常喜院からは、後に西大寺の興正菩薩般若尊や唐招提寺の大悲菩薩尊などすぐれた高僧が輩出し、めざましい活躍をされています。上人には「唯識論尋思鈔」・「法相宗初心略要」・「法華開示抄」など当時の仏教学の最高水準をゆく幾多の著述がありますが、その深い内省ときびしい求道を物語る書に「愚迷発心集」があつて、読む人の衿をたださせます。かの法然上人が浄土宗を開かれたとき、その徒の中には教をあやまり風儀をみだすものがありましたので、これを憂えて「興福寺奏状」起草したのも上人であつたと伝えられております。

かかる世にたぐい稀な学徳兼備の高僧解脱上人の衣鉢をついだのは、慈心上人覚真(藤原長房、一一七〇～一二四三)でありました。覚真は、後鳥羽上皇の側近でありましたが、当山で出家し先師の遺志をうけていよいよ戒律を厳しくし、また寺観の整備に力をつくしました。現存の五重塔は、建保二年(一二二四)、先師一周忌の供養に際して解脱上人が後鳥羽院から拝領した東寺、唐招提寺の仏舎利を納めるために覚真が完成させたものであり、小さいながらもよくととのい、特に心柱が初層で止められている点と裳階(もこし)が付けられているところは建設史上有名であります。

【※印 通常非公開】

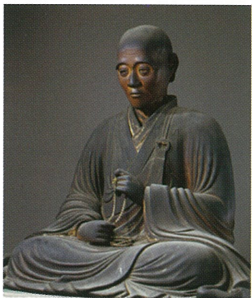


本尊十一面観音菩薩立像(重文)



秋の境内

十一面観音菩薩立像(重文)※



解脱上人像※



四天王立像(広目天・増長天・持国天・多聞天)(重文)※

寺宝・文化財